

信州・まつもと大歌舞伎

13年の軌跡①

「1回だけなら」から松本の文化に

夏の松本の風物詩「信州・まつもと大歌舞伎」が3年ぶりに帰ってくる。演目は、2008年の第1回公演と同じ「夏祭浪花鑑」。原点回帰とも言える今回の公演までの軌跡を紹介する。

◇ 当代一の人気歌舞伎役者、中村勘三郎率いる「平成中村座」を松本へ呼ぼう。地方の小都市では前例のない挑戦が始まったのは06年のことだった。その2年前の04年8月、まつもと市民芸術館が開館



した。同館の芸術監督を務める演出家で俳優の串田和美さんの下、多岐にわたる舞台芸術の話題作が松本で上演。そんな中、市民から「歌舞伎も見たい」の声も聞こえ始めていた。

伝統的な古典歌舞伎？ いやいや、松本でやるなら平成中村座でしょう。だって、串田さんと勘三郎さんがタッグを組んで、江戸時代の歌舞伎の精神に立ち返り、見ている人がワクワクする歌舞伎を上演しているのだから。

しかし、平成中村座は気持ちだけで呼べるような代物ではない。裏方まで含めるとかなりの大所帯。1万2000枚のチケットをすべて売り、多額の企業協賛金なども集め、ようやく収支が合う。東京や京都のように、歌舞伎が文化として根付いているとは言えない松本では「むちゃなこと」と

2008年7月、まつもと市民芸術館で市民キャストも交え上演された「夏祭浪花鑑」(信濃毎日新聞提供)

思われた。

「1回だけなら何とかかな。何とかする。そう腹をくくって、思い付く手を全て打った。主催する実行委員会内に設けた市民有志組織「市民活動委員会」で陣頭指揮を執った青山織人さん(77、同市平田西)は、当時は振り返る。

役者のお練り、松本城での役者と市民との交流会、運営を支える市民サポーター、市民の舞台出演、市民によるそばの振る舞い、会場での縁日、格安の三等席の販売…。

興行主の松竹と粘り強く交渉を重ね、市民が主体的に関わる松本独自の取り組みを一つずつ形にしていた。そして迎えた本番。街はお祭り騒ぎに。その様子に大喜びした勘三郎さん、千秋楽のカーテンコールで「また来ます！」と宣言してしまっただけ。周囲は慌てたが、その一言で、信州・まつもと大歌舞伎は単年の打ち上げ花火ではなく、松本の文化としての道を歩み始めた。

信州・まつもと大歌舞伎年表

年	演目	公演数	トピックス
2008年	なつまつりなにかがみ 夏祭浪花鑑	9日間12公演	お練り実施
10年	さくら ぎみんでん 佐倉義民傳	7日間11公演	登城行列と松本城市民ふれあい座開始 学びの事業開始
12年	てんにちぼう 天日坊	7日間 9公演	中村勘三郎さん千秋楽にサプライズ出演 松本小判販売 歌舞伎弁当コンテスト実施 (12月、勘三郎さん死去)
14年	さんじん きちさ 三人吉三	6日間 8公演	歌舞伎塾開催 信州まつもと大歌舞伎の「定紋」を公募
16年	四谷怪談	7日間 9公演	田んぼアート実施 木ノ下歌舞伎と東濃歌舞伎中津川保存会の地歌舞伎上演 国際シンポジウム「世界に拡(ひろ)がる歌舞伎の魅力」開催
18年	切られの与三	7日間 8公演	木ノ下歌舞伎、東濃地歌舞伎に加え、ひろしま安芸高田神楽、淡路人形浄瑠璃も上演 「付け打ち体験ワークショップ」開催 「子ども寄席」「子ども芸能発表会」実施 落語「お富与三郎」上演